



その日、ミレニウムサイエンススクールの誇る特殊部隊『クリーン＆クリアリング』の部室で、リーダーである美甘ネルは怠惰な時間を過ごしていた。

授業が終わり下校時間になったらゲームセンターに向かってアリスを探そうか？などと考えてダラダラと時間をつぶしている。

「ヒマだなあ…」

そう、ヒマなのである。

続けざまに起きた大きな事件をいくつか解決してしまったせいなのか。ここ一ヶ月以上小さないざこざばかりですぐに解決してしまうのだ。

「あいつみてえな殴り甲斐があるやつがいれば別なんだが…」

先日、小物と思っていたヘルメット団たちの掃討中にひとりの優れた戦士と出会った。

錠前サオリ。實在すら疑われていたトリニティの分派・アリウス分校が結成した特殊部隊のリーダーと遭遇し、その場と性技実現委員会が主催する地下闘技場で二度、干戈（かんか。武器のこと）を交えたが、決着に至らなかった。

フィジカルは自分より劣るものの、優れた観察力と素早い判断力で楽には勝たせてくれない相手。正義実現委員会のツルギともまた違った強敵だった。

ああいう手合いとまた戦いたいものだが、同じことをしても面白くない。そう考えていると、部室の

扉が開かれる

「あら部長、ちょうど良かった。小包が届いていますよ」

事実上の副官のような仕事をこなしている室笠アカネが何やら荷物を持って入ってきて、彼女が足掛けにしている机の上に置いてきた。

「あたし宛てに小包だあ？」

「はい、部長宛てです。念のためエックス線検査しましたが、中身は爆発物などではなく、なんらかの瓶に入った錠剤のようです」

「ふうん…頼んだ記憶はねえが…」

怪訝な顔をしながら雑にボール紙の部分を引き裂いて中をのぞくと、瓶とともに一通の手紙が入っている。それを開くと、ずいぶんと几帳面そうな文字が並んでいた。

「なになにい…」

『拝啓

一銭の価値も生まない研究ばかりしているおバカなミレニアムサイエンススクールの連中を支える守旧派の守護神・美甘ネルさんこんにちは。

先日行われた地下闘技場での痴態！！！！たつぷり拝見しましたとも！！！！配信映像も録画にブロックかかってたんでわざわざ購入して何度も繰り返し見るほどにたつぷりと拝見しました！！！！

あれだけ無様な姿さらしという勝ちきれなかった

気分はいかがですか？最悪ですか？最悪でしょうとも！

そこで心の広い私が恩讐を超えてこの薬をお届けしてあげます！

これは百鬼夜行連合に滞在中のとある薬師さんからいただいたもので、なんでもアーユルヴェーダと神農本草経の知識を融合させて最新のホメオパシーも取り入れた神薬とのことです！

その効果はなんと…六時間だけおちんちんが生えちゃうんです！！！！

驚きました？驚きましたよね？

副作用もないそうなので、安心安心！

ぜひこの薬を作ってまたブザマな姿を…じゃなかった、あの戦いの決着をつけてください！

ああ、お代は結構ですよ。私は優しいので！

敬具』

「…なんだこれ。送り主の名前も書き忘れてるしよ。ま、こんなアホな文章書くような奴はミレニアムに……いや、こいつ以外にもいるけどあつちは一応セミナーに復帰してるわ」

先日ミレニアムサイエンススクールで大きな混乱を引き起こそうとして失敗した疑似科学部の部長・ミライの顔を思い出しながら手紙を投げ捨てて瓶の中身を覗く。

「こんなモンがねえ？」

——別にミライの口車に乗りたいわけではない。

しかし、あの錠前サオリと戦う口実としてはちょっと良いかもしれない。

「ま、実際に効果があるかどうか試してから、だな」

ネルはニヤリと笑うと、薬の入った瓶を自分のスクールバッグに放り込んだ。

その瓶をネルから受け取り自身の方でも成分と効果を確かめた性技実現委員会の仲正イチカは、ネルのご指名相手・錠前サオリと連絡を取ると、人目を

避けカタコンベで彼女と会合を持った。

予定より五分早く来た彼女に事情を話し、預かった錠剤の一部を渡す。

「で…この薬が、それだと？」

「はいその通りっす。それで…そもその話なんすけど受けてくれるっすか？」

「ファイトマネーがしっかり払われるならこちらは何も問題はない」

「即断っすか。いやはや…」

話が早いのはありがたいが、どうにもその『速さ』に生き急いでいるような危うさを感じてしまう。

アリウス分校への進撃に関わったひとりとして、
恵まれたトリニティに生きる自分には分からない葛藤や苦しみがあるというのは想像できるが、そこに触れて良いものかとどこか後ろめたい気分にもなる。

「…それ以外に何か？」

「ああ、じゃあ改めて確認っす。基本的にセックスバトルルールで行われる試合で、射精の回数に制限はなくてどっちかがダウンするかギブアップ宣言するまでのデスマッチ形式になるっす。相手を押し付ける、振り払う、しがみつく、なんかは良いけど本気でぶん殴ったり頭突きしたりはダメっす」

「わかった。気を付けよう」

「あとこれはネルさんからの伝言なんすけど」

「？」

そこでイチカはひと呼吸。できる限りネルの声色を真似て

「『あたしはまだこの薬の効果は別の生徒で確かめたけど実戦では使ってねえ。そっちの手に渡る明日から使うことにする。信じるか信じねえかは勝手にしろ』。だ、そうっす」

「…そうか。わからない美学だ」

「ですよー。でもネルさんってそういう人だからしょうがないっす」

「それが彼女の生き方、か…」

生き方を選ぶ環境になかったサオリにとってそのような考え方は正直まったく理解できないものだ。ただ、最近の彼女はそれを見事なことと片付けるのではなく、そういうものもあるのだろうと理解はしている。

ならばこういうときにすべきことは

「では彼女に『私もその条件でやらせてもらおう』とだけ伝えてもらえるか？」

「はい、お安い御用ですよー」

「……………」

軽快に敬礼をしてみせて去っていく仲正イチカの背中を見送りつつ、サオリはすでに来るべき試合のためのシミュレーションを始めていた。

「それで私を呼んだのか、サオリ」

「ああそうだ。白洲アズサ、対美甘ネルでのセックスを考えた場合、お前が一番適任だと考えた」

「…なるほど」

たしかにミサキもアツコも、小柄なヒヨリでさえも巨大な乳房を誇っているために美甘ネルと似た体型とは言いつらいだろう。ならば自分が一番適任かと納得する。

特殊部隊として訓練を受けた自分たちは、性的な拷問を受けた場合の訓練や性的な尋問の仕方もある

でいるが、その技術をまさか平穩が訪れてから使う羽目になるとはアズサは皮肉を感じていたが、ギャランティがもらえるなら異存はない。

そのギャランティのことで聞きたいことがあるのだと思い出したアズサは、疑問を口にした。

「サオリ、私の報酬についてだが、ファイトマネーを考えると過分じゃないか？」

「そこは問題ない。対戦相手がファイトマネーを不要としているので、私には倍の金額が入る」

「……………」

「納得がいけないといった表情だな。大丈夫だ、私も理解できていない」

「…わかった、では始めよう」

なぜそんな条件なのかまったく意味は不明だが、これ以上考えても無意味だとアズサは判断した。躊躇なく衣服を脱ぎ捨てると、ベッドの上に腰掛ける。

「始めよう、サオリ」

「ああ…」

応じて服を脱いだサオリの股間には、普段見たことのない立派なペニスが生えている。かなりの巨根で思わず視線が釘付けになってしまった。

「…そうだ、美甘ネルのペニスのサイズの想定はどうする？装着するデイルドはかなり種類を用意したが」

「私のペニスと同じサイズでまず一回、次にこれより大きいサイズで一回試したい。その後はアズサにもこの薬を飲んでもらってフェラチオからの口内射精や挿入からの膣内射精が自分にどんな影響を与えてくるかも調べたい」

「これ以上のサイズも？…わかった」

そんなサイズのペニスがあるのだろうか？アズサの少ない性知識では想像もつかなかったが、サオリの想定は的中することになる。

「うわ、部長のおっきいー！」

「そ、そうか？これはまあ…そう…だよなあ？」

「うん…リーダーのそれはちよつと、私からしても想定外すぎる…」

薬を飲んだネルの股間には、サオリを上回る大きさと太さのペニスが隆起していた。小柄な肉体に不釣り合いな、膝まで伸びた第三の足と形容しても偽りがなさそうなサイズのそれを見て、一之瀬アスナと角楯カリンは興味津々といった様子。

「さすがにこれは私でも試したことないサイズだな。ご主人様よりすっごいもん！」

「お、おう…？」

なにか聞き捨てならないことを言った気がするが、くんくんと鼻を寄せて自分のペニスのにおいを嗅ぐアスナの姿を見ると、言葉を紡ぐことができない。

「うーん、これはとってもおいしそう！部長！楽しませてね」

「あ…いや、訓練なの、分かってっか？」

「あーそうそう、訓練！えっちの訓練だったよね！」

「アスナ先輩…私たちはリーダーがライバル認定した相手をセックスで屈服させるため、そのトレーニングでここに来ている」

理解しているのかしていないのか。あはははと

笑いながらアスナはネルの太ももの上に乗ると、ペニスに手を伸ばして微笑む。

「じゃあ、いっっぱい出してね、部長！」

「ちよ、バツカお前いきなり。うあ、なんだこれすげえ気持ちいい…!?!」

「じゅず、ずぞぞぞぞ、んじゅううううう…」

「待て、それすぐに射精しちま…うわああアアアア!?!」

「…部長、こうなったらアスナ先輩は止まらない。私はとなりで控えてるから…」

スイッチの入ってしまったアスナと初めての快感に悶えるネルを置いて、カリンは考えるのを放棄し

た。

——激しい歓声。そして地下闘技場とは思えぬ

万来の観客。

『さあ！今夜のメインイベント開催です！！！実況は今夜も私、川流シノンでお送りいたします！。まさか再びこのカードがこのリングで実現しようとは！一方はミレニウムサイエンススクールの誇る小さな戦略兵器！美甘ネルさん！！そして、このリングで波乱を引き起こし続けている錠前サオリさんのふたりが前回の決着をつけるべくデスマッチ形式のセックスバトルルールで対決します！！！！』

「ちっせえって言うな！！！」

『しつ失礼いたしました。そして今回は特殊な条件がついています！すでにリングに上がったふたりの姿を見て皆さんお分かりのことと思いますが、お互いの股間には隆々としたペニス！デイルドの代わりにこれを使うことが認められています！解説の仲正イチカさん、これは性技実現委員会の試合でも初めてのことですよね？』

『そうっすねえ。今回ネルさんからご提供いただいた薬の成分解析は終わってるので、今後はこういう試合も組めるには組めるっすが…ともかく、今回の試合でどんな影響が両選手から出るか？を調べてから、って感じっす』

「サオリー！ぶち犯しちゃえー！」

「ネル！てめえに十万賭けてんだぞ、分かってんだろうな！！！！」

「サオリさん！今日も素敵イーーーー！！！」

「ネルせんぱーい！メス顔見せてえ~~~~~♪」

様々な欲望がつまった人々の声が美甘ネル、錠前サオリのふたりを包む。

だが金網に覆われたリング上のふたりだけは静かに見つめあっている。

「…やはり、大きいな」

青いビキニスーツから大きなペニスがかぼれそうなサオリの視線の先、黄金のビキニスーツからサオ

リを上回る巨大さと太さのペニスをぶら下げてネルが立っている。身長はサオリが圧倒しているのに、ペニスの大きさでは完全にサオリが負けていた。

「ンだよ…でけえのは偶然だよ偶然」

「そうか。まあバイタルポイントが大きいのは弱点にもなるぞ」

「ハッ、ほざいてろ。すぐにひいひい言わせてやる」

「やれるものなら…と、前回も言ったはずだ」

「上等オ！」

その言葉と同時に、ゴングを待つことなくふたりはリングを蹴った。

「ちいっ」

「ぐッ」

互いに優位な位置を取ろうとリング中央でぶつかりと押し合い、そのままネルの力が勝って倒れこむ。すぐに身を起こしたサオリだが、ネルがその頭を抱え込んで、覗き込んできた。

「素晴らしいながらてめえだって良いモンぶら下げてんじゃねえか。さすがにあたしには勝てねえっぽいけど、ほら、先っぽ触っただけでムクムクってなってきたぜ？」

「クッ…そういうお前は触れもしてないのにもうガチガチのようだな？」

「ったりめえじゃねえか。このスーツがチンポに合

ってねえんだからずっとギンギンだったの」

サオリのペニスの上に置かれたネルのペニスもすでに硬くなっている。巨根というのすら生ぬるい大きさはあまりに暴力的で、ネルのセックススタイルそのものようだ。

「せっかくふたなり同士のセックスバトルなんだ…楽しもうぜ？最後に勝つのはあたしだな」

「その余裕が…くう、いつまでもつか見もの、だな…ううう」

「さっそくカウパーだらだら流しながら強がっても意味ねえよ。オラ、さっさと一発目を射精しちまいな！」

「あ、やめ、んんん、うううううう！！！！」

びゅるる、びゅるるー！と、股間を覆うビキニス
ーツのパンツ部分にザーメンがあふれ出す。それを
邪魔だとばかりに引きちぎってサオリのペニスを露
出させると、ついでに自分のペニスも露出させて重
ね合わせた。

「ちようどいい潤滑油じゃねえか。ほらっ、てめえ
のチンポとあたしのチンポでしごき合おうぜ」

「このっ……あっああっ……そんな、乱暴にして……
…はあっ！」

「こんないい感じのチンポ持ってたからもつと堪
能しろよな！」

「ぐうううう、この……うううう……！！！」

ネルの巨大なペニスがサオリのペニスに覆いかぶ

さるように密着し、ネルの腰が叩きつけられること
によって裏筋同士が擦り合わされる。

「どうした？気持ちよくて反撃できねえか？このま
まじゃまたお前だけ出しちまうぜ？」

射精直前のザーメンの迸りを感じたサオリは腰を
引こうとするが、ネルの手を肩に回されて押さえつ
けられ逃げられない。

「くっあっああっ！これ以上はアアアア！いくっ……
…射精るウウウっ……！！！」

ドピュルルルルー！！と勢いのある射精はサオ

りの胸まで届き、腹も内腿も全てサオリ自身の精子で汚れていく。しかし休む暇もなく再び竿同士がこすり合わされて快感を与え続けられる。

「くう、ま、まだまだ、だ……はあっ……この程度では……」

「ハッ！そう言ってられるのも今のうちだ！」

ネルはサオリの前に仁王立ちになると、ペニスを擦る。そしてペニスを彼女の眼前に押し出し、両手でサオリの首根っこを掴み持ち上げた。

「食らいやがれッ！」

「んぶうううううううう！？」

「齒あ立てんじゃねえぞ！使ってやるからよ！」

ネルは強引にイラマチオをさせると、サオリの口内を前後に蹂躪する。

「うぐううう、んんんっううううう！！！」

「いいぞお、熱々でまるでマンコみてえだなあ！」

「うううう、ンン、ぐうううううッ！！！」

「おら、口のマンコもつとすぼめろって！」

サオリが顔を真っ赤にしてネルの巨根をほおばる姿がモニターに大写しになり、会場中が盛り上がっていく。

「んっ、
んん
ゝゝ
っ
！」

「普段すましたお前の力才がこうなるのは……たまたまねえ、な……！ おお、来た来た、んおおおつ、出すぞ！」

「んん!?ンンンンンー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ツ!!!」

サオリの後頭部を押さえつけてペニスを喉奥に突き入れる。亀頭が締まる喉を通り越しさらに奥へと入り込むと、一気にザーメンを注ぎだした。

「おおおおお！？」

「うおおおおおっ!? すぐえ出るぞ! ハハッ、たしかに気持ちよかつたもんなあ! てめえも飲んで味わえよ!」

「ごぶつ、ごほつ……げほつごほつ……おええええええ」

大量のザーメンを吐き出すサオリだが、それでも喉奥に残ったものは飲み下してしまう。

「おいおいまだ終わりじゃないぜ！」

「ごほっ……ああ、そうだな……！」

「んぎ！？んぐああああああアアア！？」

優位を確信してサオリを押し倒そうとしたネルだったが、まったく意識していなかったアナルをサオリの指に貫かれ、身体をこわばらせる。

それだけの時間があれば、サオリが窮地を脱する



には十分すぎた。彼女はネルの背後に回り込むとリングの外側にある金網に彼女を押し付け、その小さな乳首とペニスに手を伸ばした。

「今までいくのを何度も我慢して私を犯していたの
だろう？今度は私が楽にしてやろう」

「が、やめ……、ああアアン……！」

サオリが乳首をはじくたびに、ネルの身体が小刻みに揺れる。ペニスからは白濁した我慢汁があふれ出し、イかせてくれと懇願しているようだ。

「こんなに小さな突起を勃起させて……ペニスだけでは我慢できないのか？」

「が、てめ……く、や、ふああああ！？」

「イけ。無様にな」

「ああああ、ひ、くうううう、や、アアアア……
ーッ」

びくんと身体を仰け反らせたネルが絶頂を迎え
ると同時に大量のザーメンが吹き出す。

「くううう……はああアアアッ」

「ふん、……さすがはミレニアムのエージェントだ
な。訓練で仕込まれてる分、いろいろ開発済みなよ
うだ」

「おまつ……やめろ……んああッ」

「ほう……ここを弄られてこんなに感じるとは。敏

感すぎではないか？」

サオリはネルの乳首をつねったり弾いたりする度にネルの口から艶めかしい声が漏れてしまう。

「ほらっ……もっと気持ちよくなってもいいんだぞ……？」

「ぐ……てめえ……調子に乗るなよ！」

「フッ……まだ抵抗するようだな……ならば仕方ない……刺激をひとつ追加だ」

「ぐあ……んおおおおおおお！！」

金網に寄りかかりながら立っていたネルに、背後からペニスを押し付けて膣へと押し入っていく。ネ

ルの異様な巨根ほどではないが巨大なサオリのペニスが、ネルの小さな身体に分け入っていくのはかなりサディスティックな光景だ。

「んあああああ、この、いきなり入れやがって………離せ！」

「断る」

ネルの両手をつかんでその自由を奪うと、ネルの巨大なペニスを金網に押し付けたまま、まるでオナホールでも扱うかのようにネルの身体を蹂躪していく。

「あ、あたしのチンポが、こすれて…ひアアアッ！？」